



親鸞鳥聖人繪詞傳 三



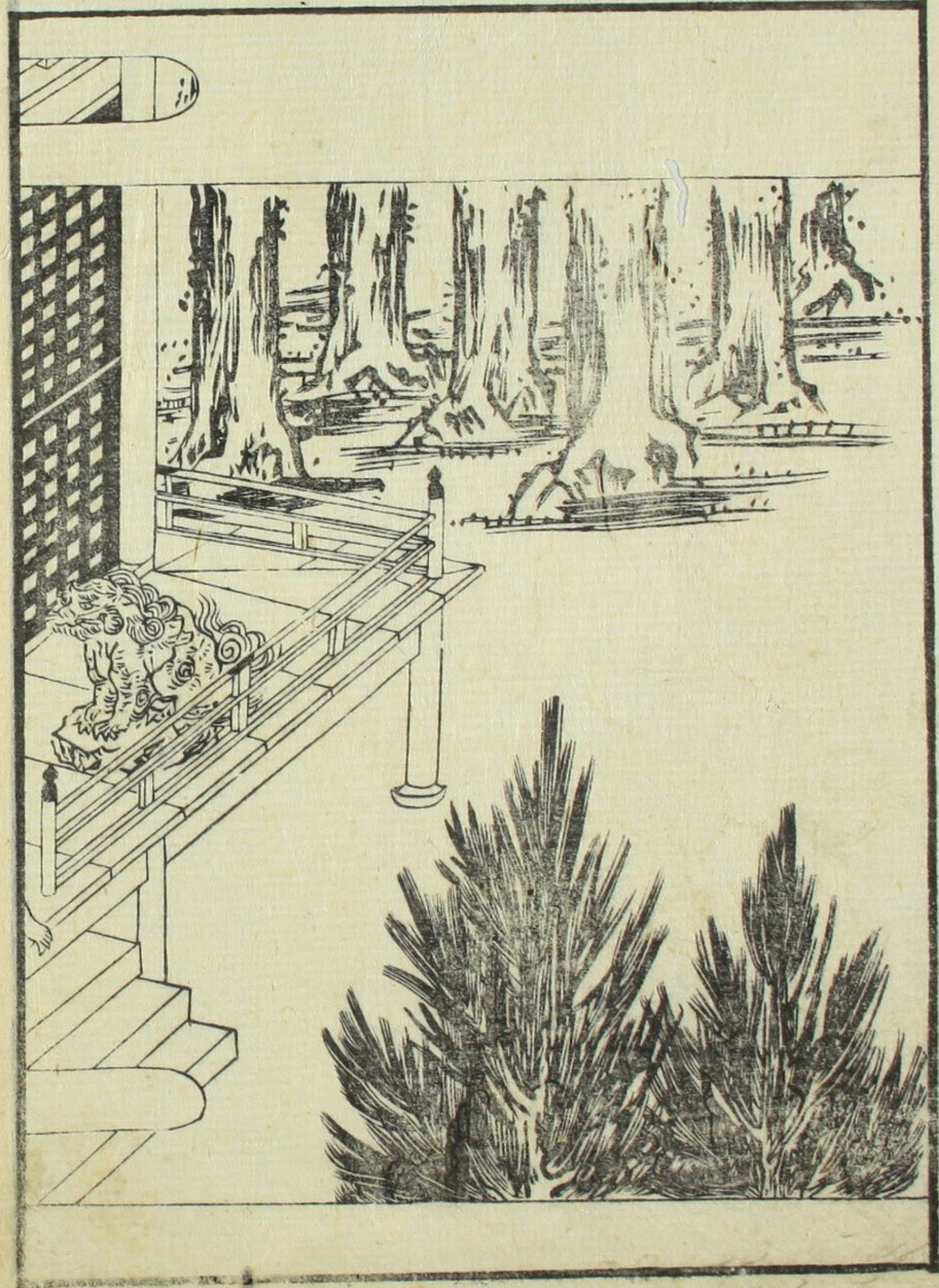
親鸞聖人繪詞傳卷三

聖人五條西洞院小まきしん時仲春の比常陸國
那荷部大郡口の庶民平太郎と云ふの地頭の
役よきとて紀州熊野一木浦より奉り想とて
比山一歩派運ぶよの潔淨なるりまはたら
すら神の答ゆりしを流人おとまの一里死るに
平太郎の當初取入の善化派うけしものりまは
只一心よ沐後よゆ依して後世のつゝものゝ心
けゆるよけ度云勢よかど是地なく流るる聖
ばんとあやで先河津一糸をて仲のゆいし



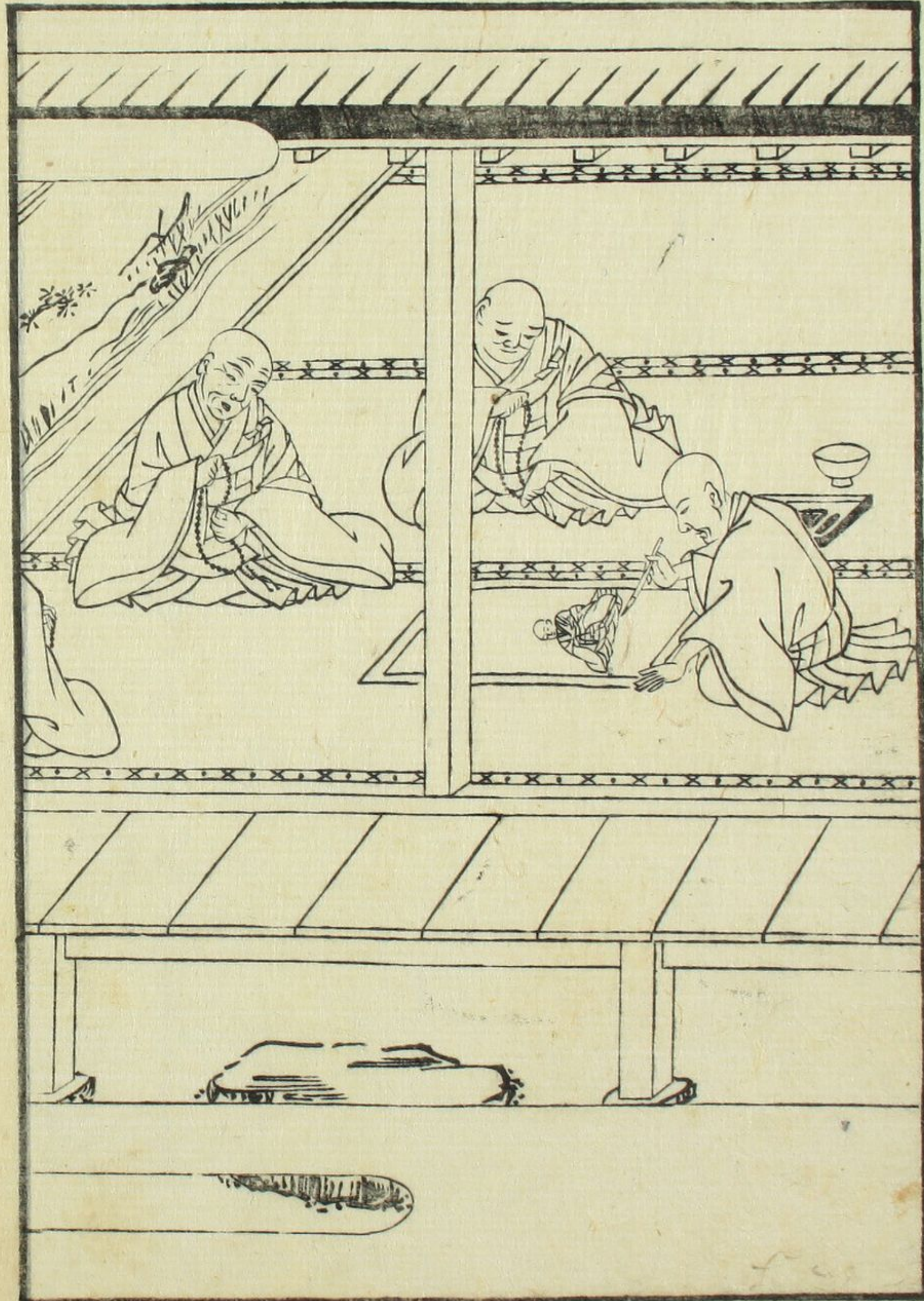
友誼と蒙りたり聖人なること宣く作れ
の方便の成生と縁縁して佛及し入せむなり
熊野澄滅殿の本地すから西方の浄土也
尤もば一向と念佛し多消でんに何の怖るあり
本より内懐虚儀の元夫なりと法て外又賢者
進の威儀と刷るるを主心と心座あり
小本地の誓約と信ト二心なく念佛して登山と
神威と雅志むるより大神明なりと信ふる
めざりしたまふと道ふよりて平右所
たにま教ふ任せて道乃他法よりと威儀と結事

かく唯誓願に信じて他念なく果して事なり
るぬ神前と通夜よりに於現寶殿の扉と押開
こ衣冠の姿と然て宣く汝何の故に潔前せ
どして我前と事なりと時聖人忽然とわは
ま出あひ是の善信のともめ小任る系る者
作り作りたりと於現勢派と志くし聖人
色代わり敢く然る事なりと事なりと事なり
おかりぬ奇異なりと思ひし一攻路の時聖人
事なり件の事と事なりと有りむと作り
尤も思議のことなり



御弟子入西房日未上人の壽影沃うつし
んとあふりつわり西人暗ふ志とあつし
て七條辺小定禅法橋と云佛繪師あり破り
はさしめよと作らる入西の體察のひひは
とふらしかの法指とて西人の教と譯せ
しむ不定禅法と流しとるの昨夜不思議の
靈夢は感とゆりたふげり僧二人本
て定く一人の僧と吾光寺本願の沖房あり
汝の傍の志教沃うつしとわしつ
の是夢の中と扱ひ生身の跡は如來とて

の毛とらて教しつりき今この西人の
容夢の中乃化僧と女も遠たすらんと感
涙神とあつりて見えたり夢の仁治三年壬寅
五月廿日の衆とてゆき西人七十歳の沖時
なり

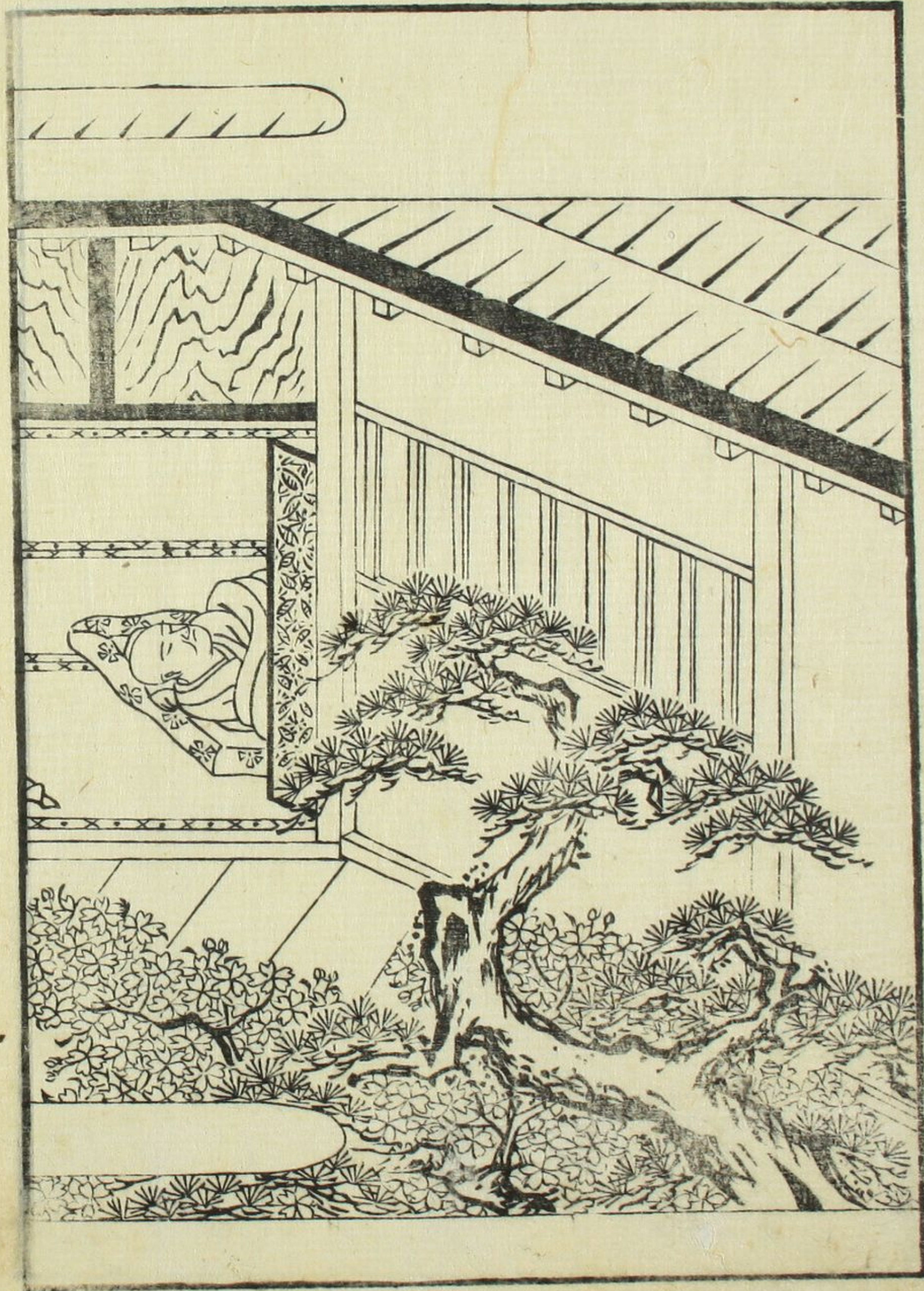
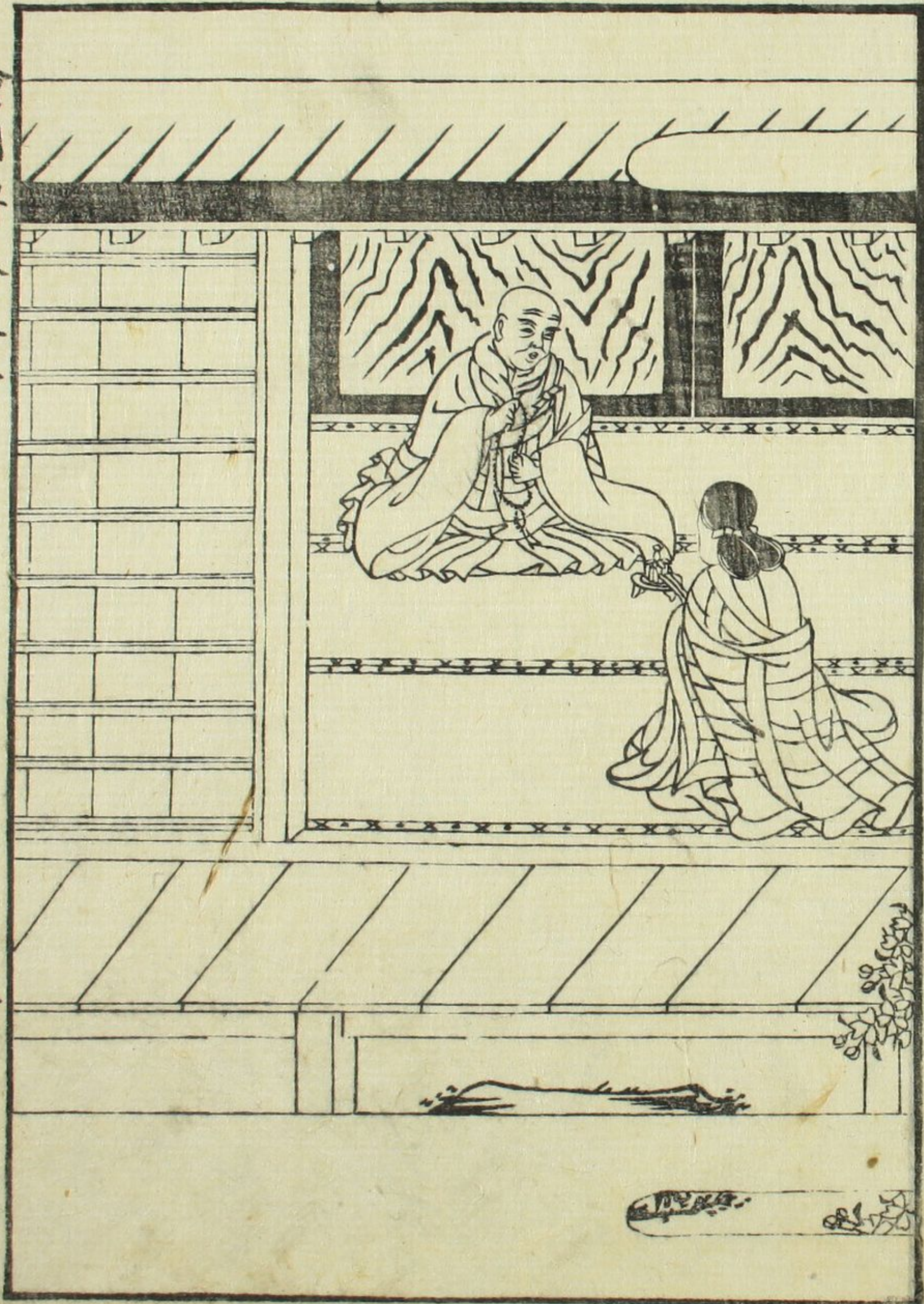


聖人七十一卷の沖時より八十六卷乃をたむる迄
りあくの聖教は述化編集まじりて滅後
の衰化は疎しあふ
建長八年仲春の以聖人いさる沖病氣あり
顯智房連位房友人看病と車の序わらま
に連位房問ていさく聖人はバツなる人と思
定めたまふや顯智答て云ゆさく如來の應現
とおもひゆるこ連位志むく肯ざる体とさきば
予も感時とさ思ふ事もわり又わつ時を疑うく
んえの事もわりとさ思ふ事もわり又わつ時を疑うく
んえの事もわりとさ思ふ事もわり又わつ時を疑うく

とてあつての女か、笑てをさぬ内よ実証知た
ましんと斗トさきとら統るに連位房夢想と
感トぬ其多よ聖徳を子聖人礼したまふ
たのたまり

敬禮大慈阿弥陀佛
為妙教流通未来生者
五濁惡時惡世界中
決定即得無上覺也

時小二月九日の夜にるを夜明て後連位房燈よ白
てさきく顯智房の神通わりおそゆるき人ま
りく獨けぶをさき

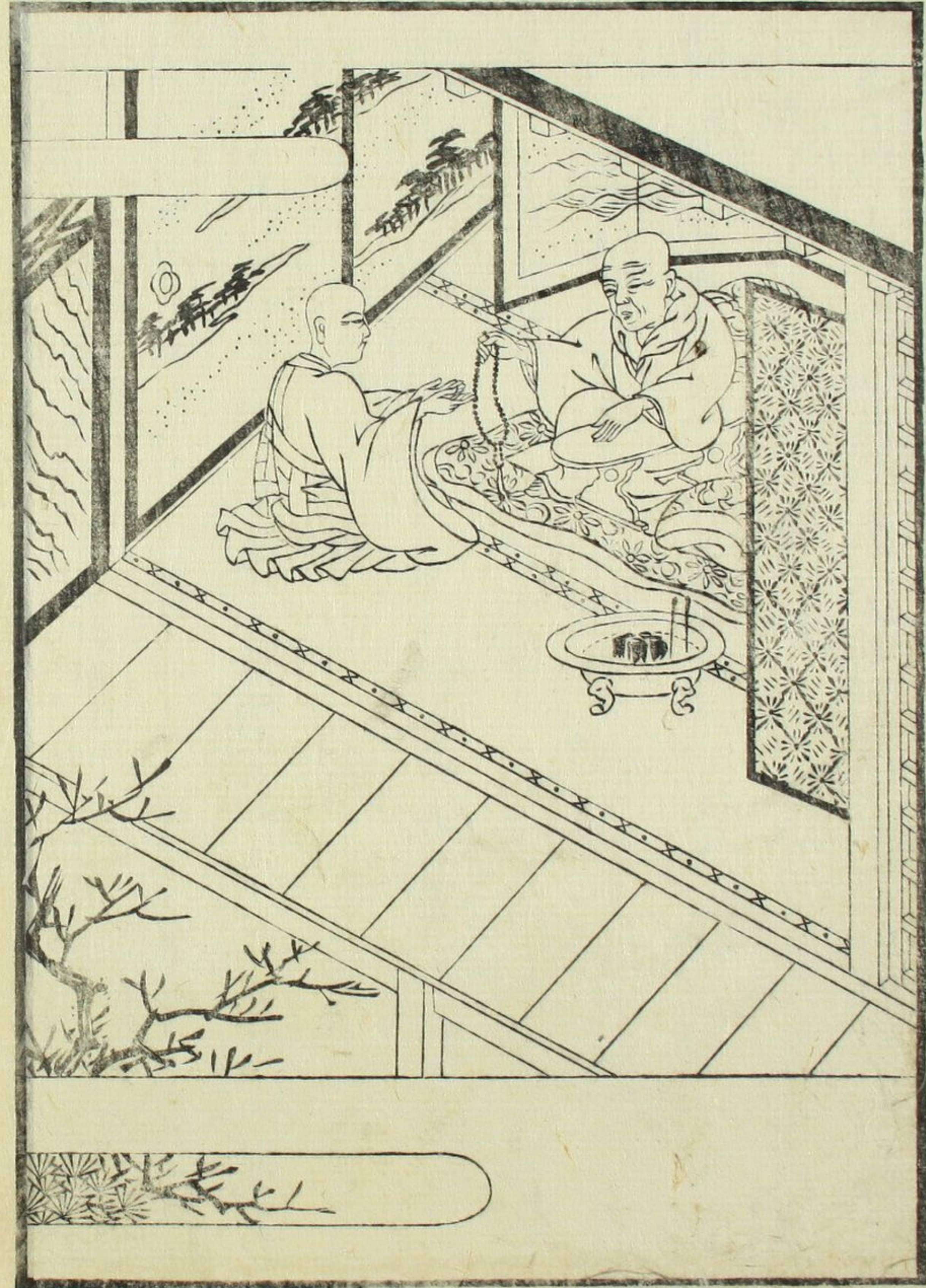
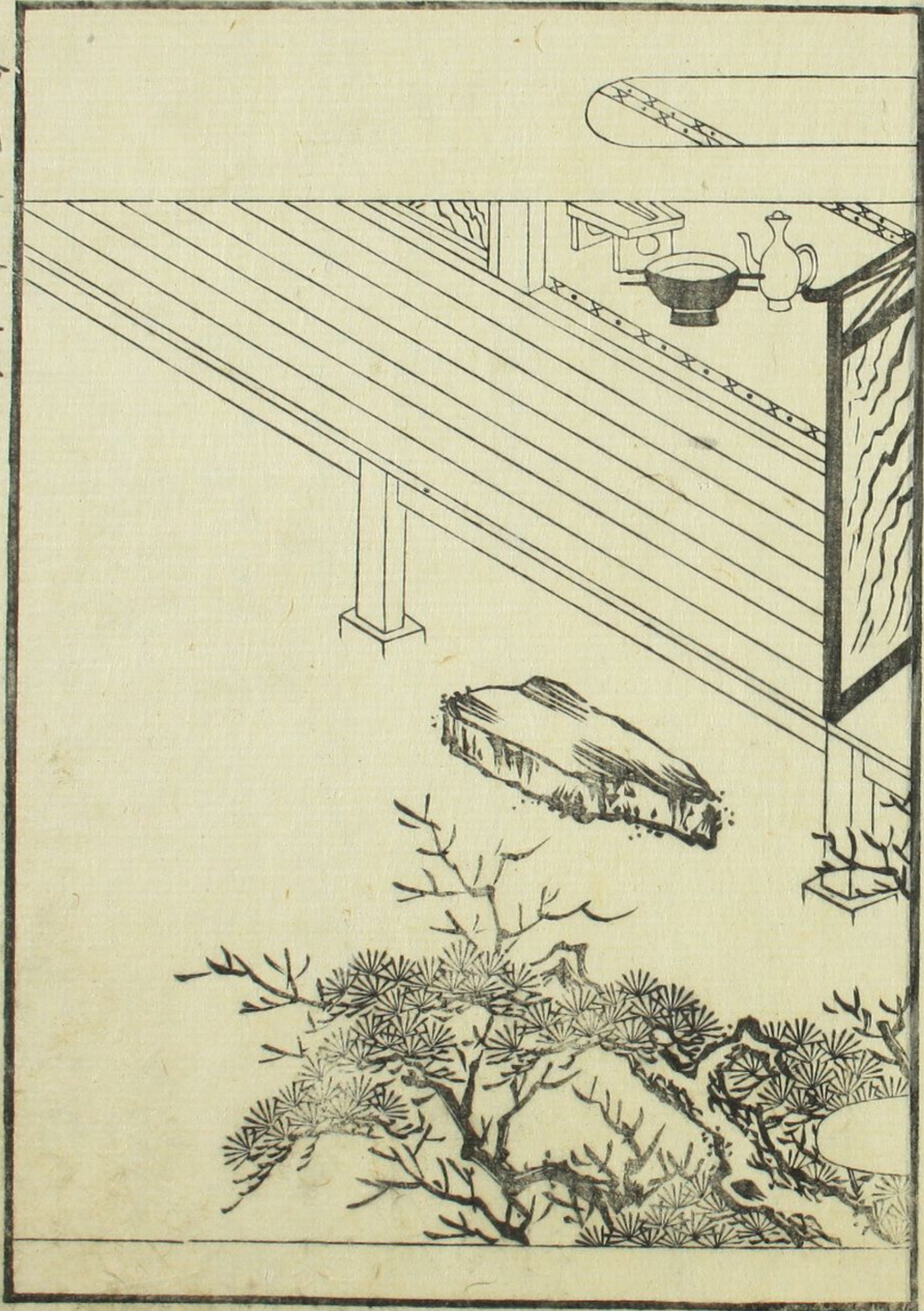


正嘉二年戊午四月廿日西洞院浄坊に於て顯
智一唯授一人の口決法浄相傳すしく同年十二
月田専修寺乃住持職法附与とあり是と今
年三月真佛之人遷化ありしにともて也
弘長二年八月の頃より門身の幸とい來もひり
して洛陽三條坊門の小側富小路の西側善法院
移りまゆは是ハ浄舎牙天台宗善法房尋有
僧都の坊舎也十月末及く所先疾を浄心
地ましき給仕の浄弟子とあり並又尋有俗
わいしひて予阿房光正と云新系の浄弟子と

使として遠に國系畑乃専信房の方一文とあり
急ぎ高田一巻る下と送り送ともしに専信房
の計りて件の仗と並下野一巻十一月十三日
白下上けきぬも前夜顯智一人の夢に聖
人若く宣く汝は我法燈と挑だき人なり
滅後急り形く應生は疲るる事言がしくせよ
戒徒生もを付たり淨は是法法護持と
しと云く是く後不審當多うに翌日京師の
使來りると聞ゆ也歩急いで立くと京師の
をいり専信も日道して十九日夜ふ入る京

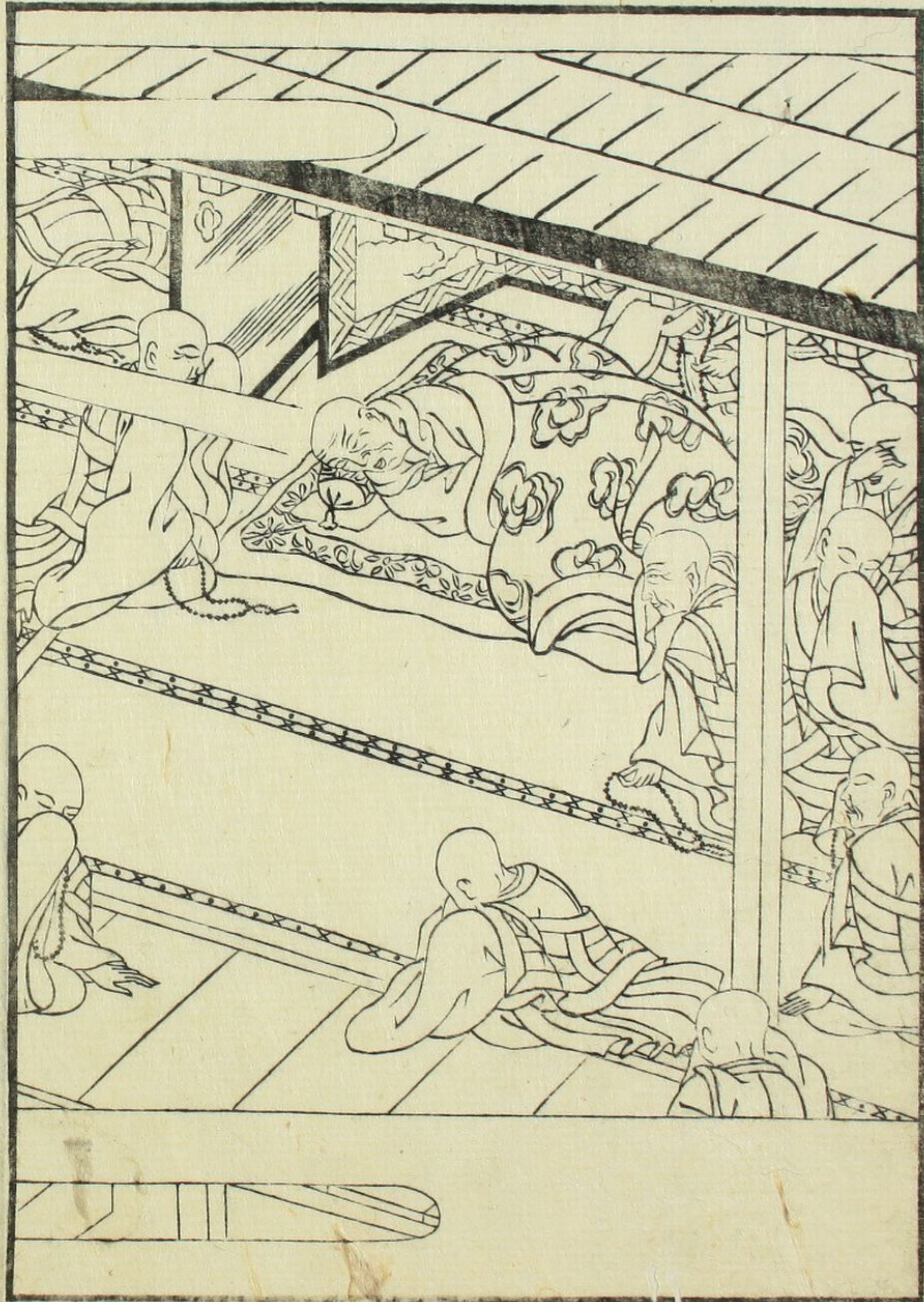
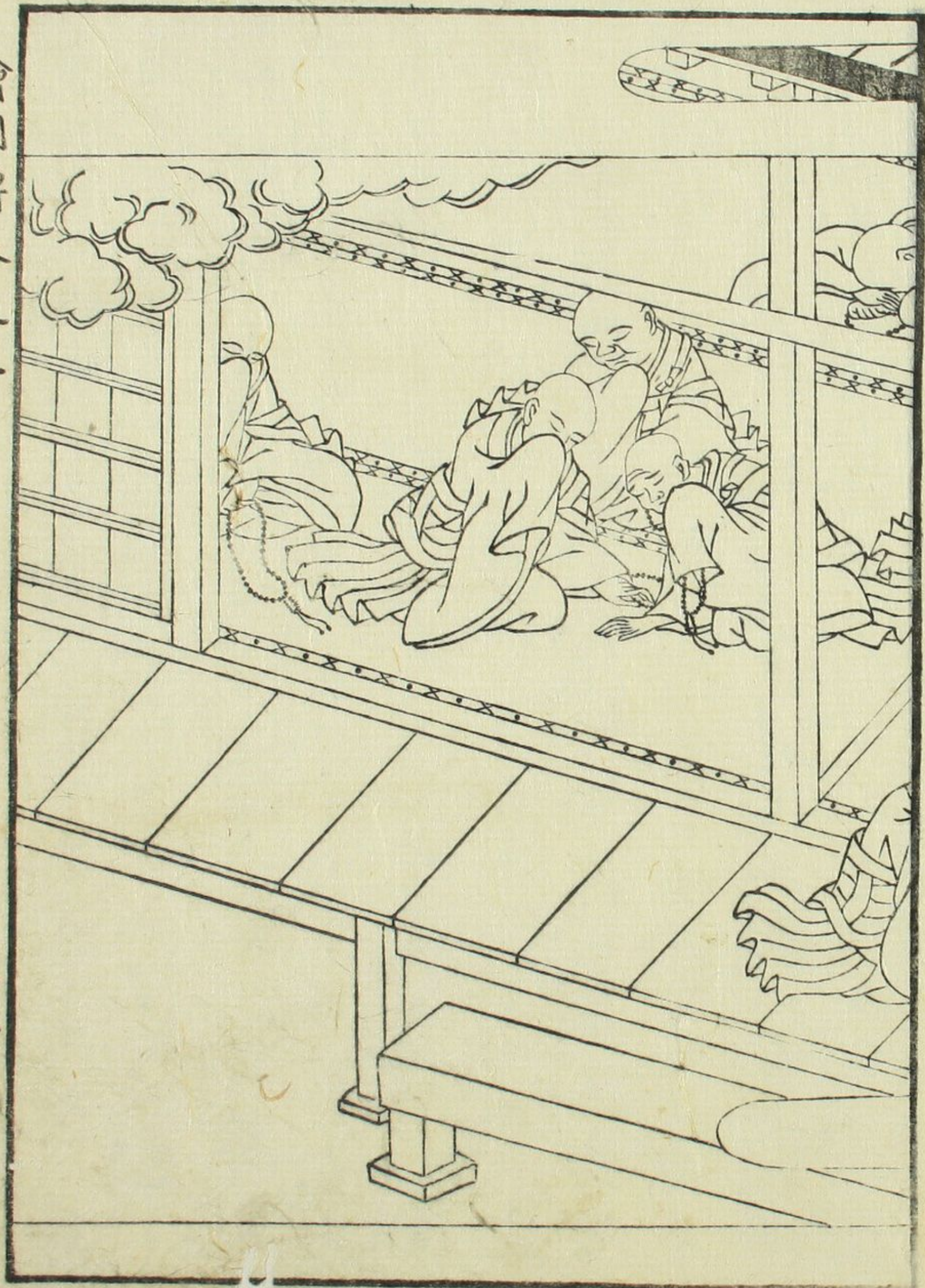
あさましき聖人對面ありて吾の何れかのがまはる
どくまふと顯智と人のことましく清又例
り由光正が若下り候しよりいとまきおろり
作く聖人開光正の河内下りて中心胸を
ぢーがさそへ東國へりり事候我んからくるよ
を形づく祇病の床後思ひふ嫉妬ものびと
よりしうらあまなまし専定いふふと清尋わ
るこまの八月より涼海と共と奥州より下りし
たまふと世をこまを對面よりハなかららるこまじ
くましくまふまはるを清いしうらも聊快すし海

と二三日の間を國東乃昔此清お清の辰仰
らとて清氣色もろりろりする顯智と人清
側をく系て清お命の口は開東の急信房も
登りて候厚し小申きうなまはるてまはる
よとあまの聖人定り彼あふくしとて福はる
ふやば西りに我法の離るるは如きうゆか
き事候しうらまの我く候り候かたま
々む顯智と人もまはるてよ事候得びとて止
あひぬれ三日よりハは解事候のこまらんま
ら称名のく勅あふ二尊廣大の清慈悲と



深空聖人の沖波化と聲ありし事波折く小
のこまひ出でて悦む事七日申刻沖波浴
あり専信房人命じて沖波化利しあり其
後人々返り頭智上人一人と沖側をくめ
さるにさう小沖波流まりて沖をより相
の念珠波賜り生ての名残死しその形見と
見し母と仰て是より返りて頭智上人
涙とばえ之かて沖波生も近づくぬとあがりゆき名
同奉むく事幸のわぶ沖波命の日は申すま
しりとは皆涙とるに障子の日は入る事來の

安んじしあり聖人は手ぶらふ仰さうまきて唯何
幸も降去りてそそきてそそ後ハ沖波佛の形りき
二十八日午刻ありて頭水面を右脇に計しあり
称名の聲年と兵と沖息止りありぬ時惟人皇八十九
代皇山院沖宇弘長弟二壬戌十一月聖人満九十
歳也満座の人々佛日すと没し法燈とん消ぬ
て悲の聲止とくやうりき時小つとてたから
香氣芬馥とくありありあり白昼の光明赫
とありて夜ふりりても弾坊の中ハ晝のめく
明り



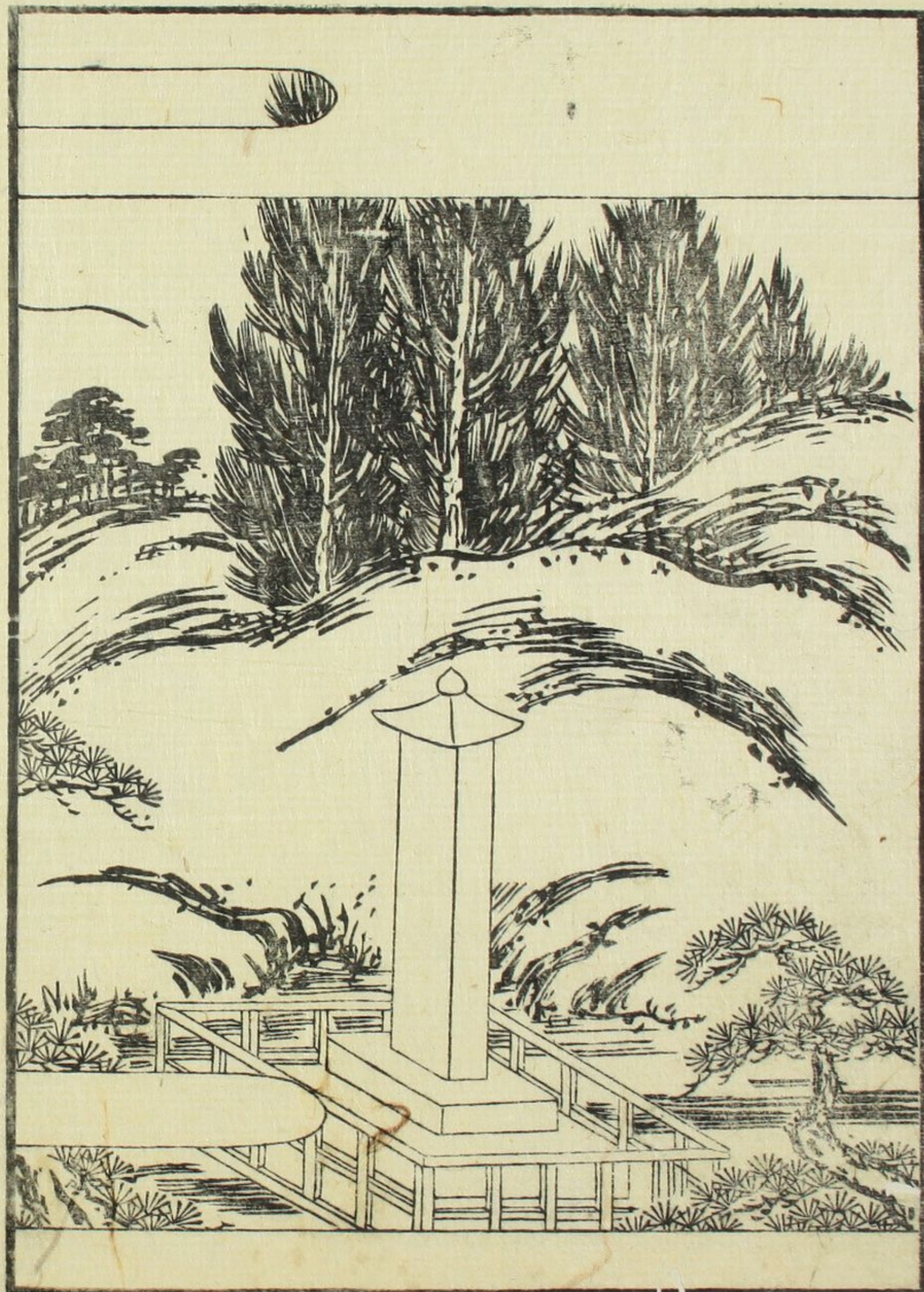
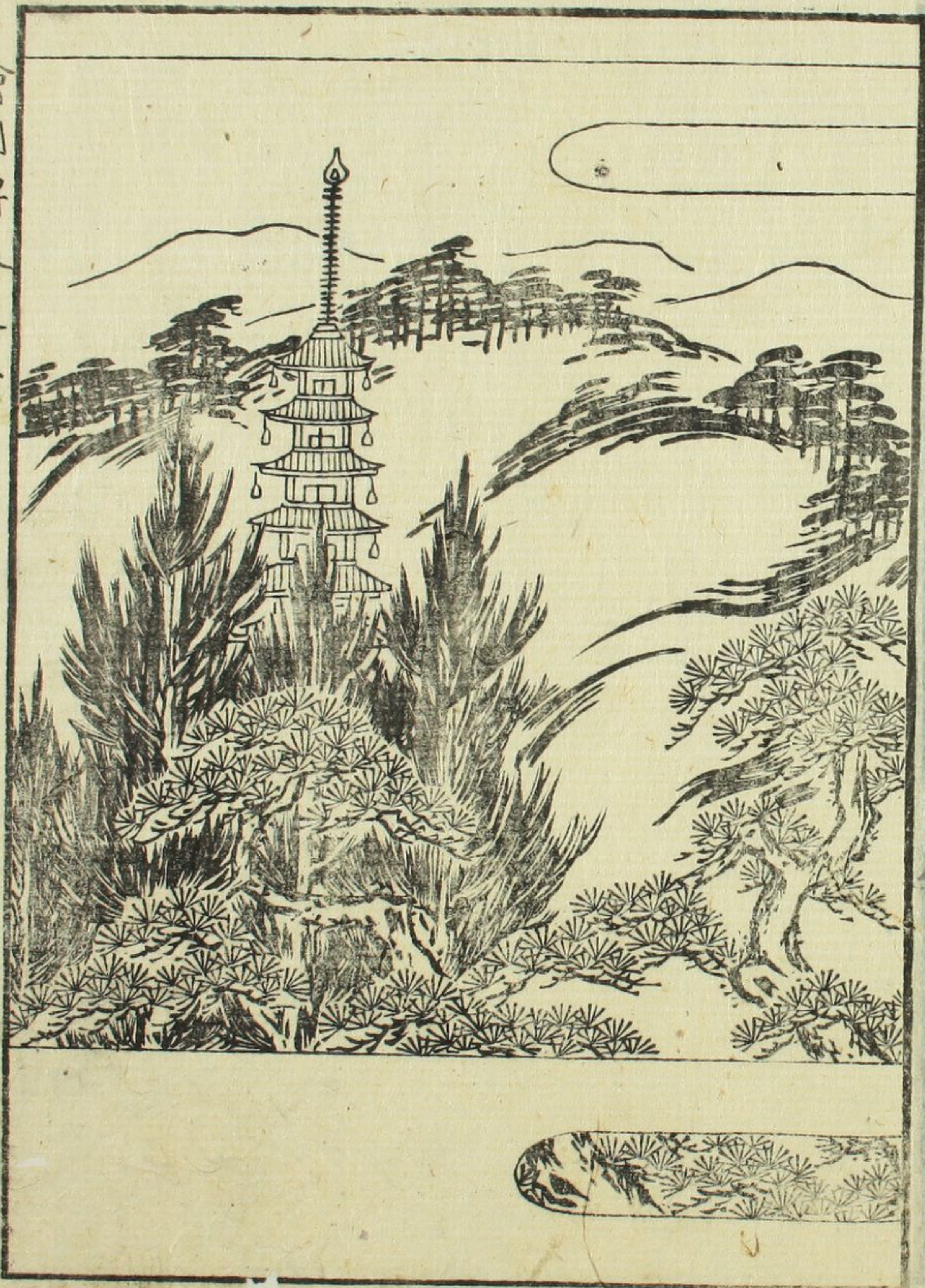
翌日九日送葬し、印信と專任と河櫃と與
顯智上人以下の泚弟子を以て五條の架沙衣と云ふ
草鞋を以て、其後、はるかに從なり、尋有僧都も
泚供へ、さきより、泚を善法院より、京極小出と云
條の橋、はるより、河東の道、はるより、全島、辺野、乃、南
延仁寺に、三時、送て、火葬し、奉る。

三日、小玉て、顯智上人の、外給仕の、泚弟子、達、尋有
僧都、印信、等の、人々、葬取、よ、奉て、泚遺骨、拾、よ
よ、正骨、二十粒、よ、條、より、十二月、六日、東山、右、水、の、禪
坊、の、隣、大谷、よ、納、め、て、石、碑、と、し、五、旬、の、中、陰

を、み、か、く、京、よ、留、り、て、是、派、は、む、總、計、二、十、五、粒
の、齒、骨、の、内、九、粒、と、總、骨、と、大、谷、小、納、め、外、十、六、粒
の、相、の、筒、よ、收、て、顯、智、上、人、を、以、て、派、持、下、り、る、田
よ、御、墓、と、築、て、九、粒、を、以、て、小、納、め、主、條、の、七、粒、を
顯、智、上、人、の、派、よ、持、り、る、里、明、年、九、月、立、日、大、谷
乃、墓、所、よ、印、信、僧、都、より、二、丈、五、尺、十、三、重、の、塔
と、造、り、碑、よ、並、て、こ、こ、派、建、て、を、り



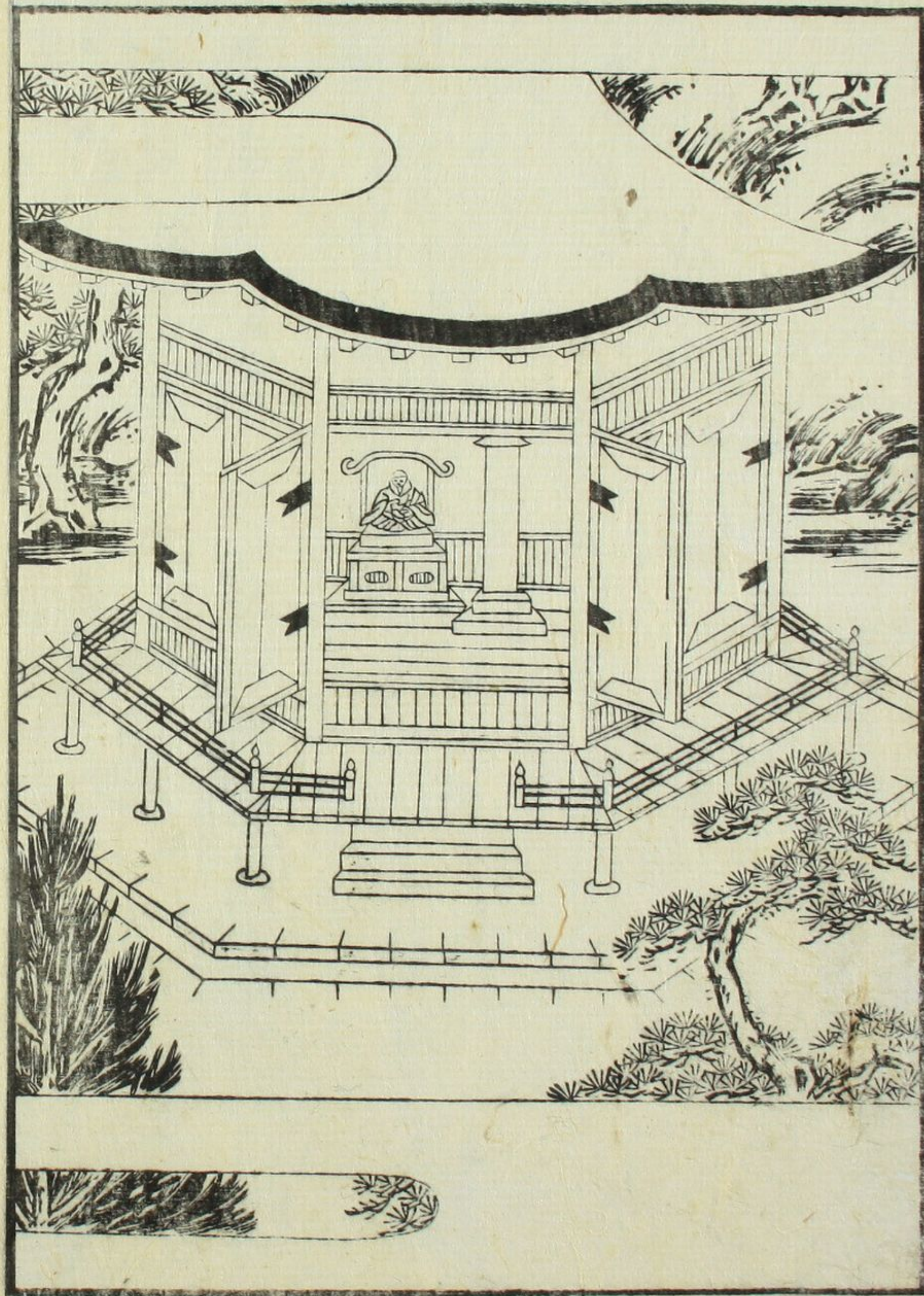




聖人滅後六年沃經て文永四年丁卯顯智大
上洛あり大谷乃墳墓沃改め移えんが為よ
京有基の所持大谷西の麓乃地沃買求む東
西の面五丈南乃面十二丈五尺北の面十丈七
尺なり

同九年壬申八月顯智之人すこ上洛あり社
師の廟堂建之の事沃奏聞せしむる
に速小綸旨と下し賜ひぬことありて前
に買たるる新地沃然して初の沃墓沃
に引移し廟堂沃建之して真教と母寺

勅榜沃ト下して本願寺と号せりすに聖
人沃入滅より十一年の後龜山院沃宇文永九
年壬申十一月廿八日沃成功法事とりぬ

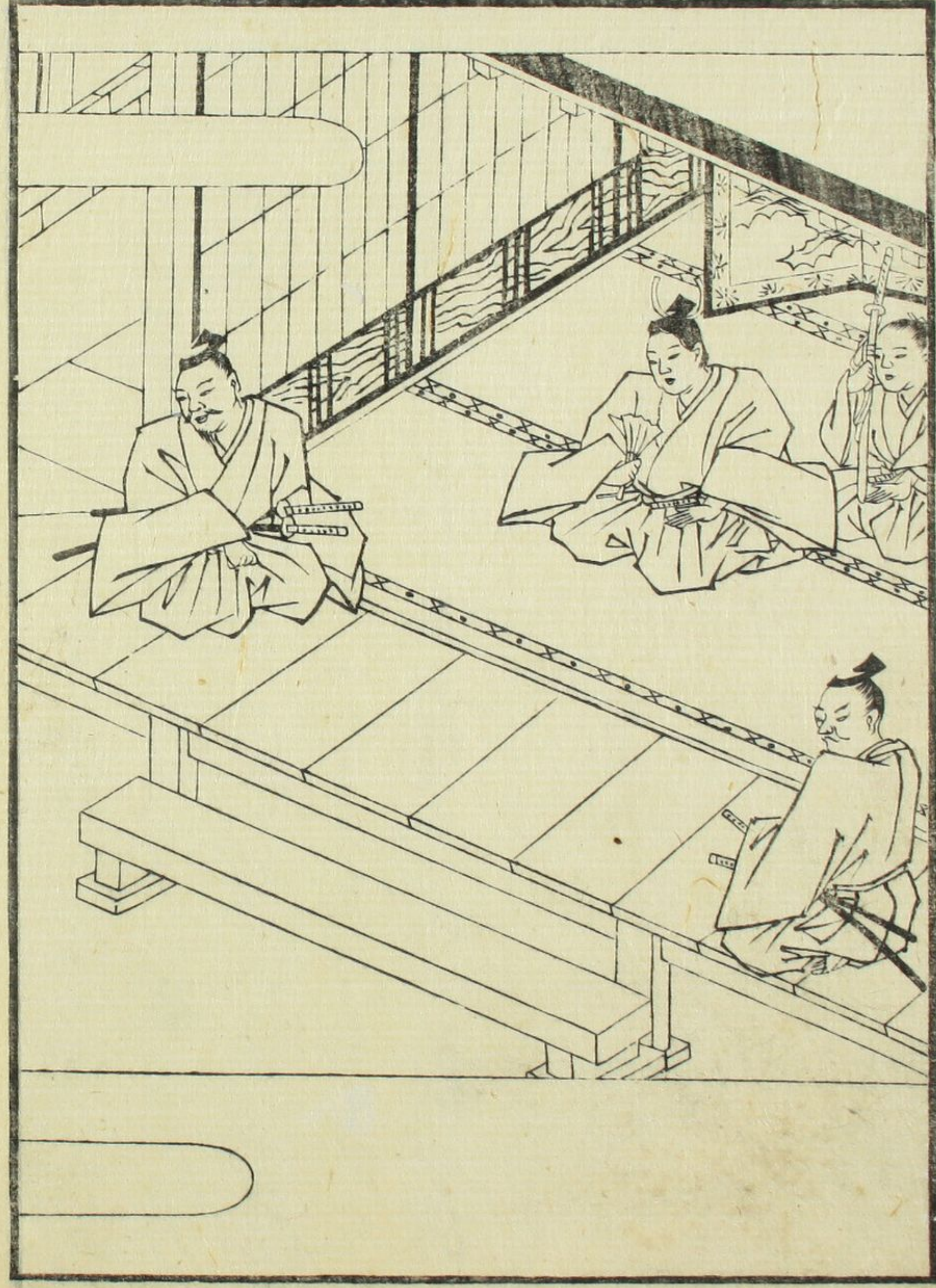


國に祖師面授列祖の行状は尋りに
 第二祖真佛一人を俗姓平氏少く桓武天皇
 皇代苗裔鎮守府將軍國香口の後胤下
 野の國司國春の嫡男なり俗名推尾弥三
 郎春時と号しかつて父母子なりは嘆こ
 常州推尾山の神より至靈驗と傳てこ
 の子に生じより多推尾は之を家名をせ
 至十に歳ふ及で才智倫ふ延より父と助け
 て改道と岡ありふ百姓ふ其判断の明白
 形ふは悲と耻も謀計は巧むものなり意

知らくして曾て欲心なく表懐の氣性ふ
 したる重科の軍こいふも毅と事は
 量に試んぐるふ問て云夫一國は司り職ハ
 善ある者ふ貴は下し悪ある者ふ罪小
 けふは改道の正しきなり汝を裁断ふ
 のごとく毎ふいふ形死罪の者ふも卿の理
 とりけし教罪と免ふれかくのごとく人
 には蕃の輩罪といふはばし却て科人
 多るるなり汝が意いんら思ふく春時を

天根の若て云某切着の身なりんぞ深き意
とる志ん但かそんれに閻魔王の六道の罪
と変断する職しそ人天地獄と落れせれふ
も見懲せ称ばそ我、同王の庭に罪人の絶る
心まゆくまきと佛の慈悲と職とて以けり
悪人とも救たまふも我とて後て佛の降
土と悪人何うとも同候にん抑一國の民と
同王のいびしき改道とや好し候人まきと
佛の慈悲とや好し候人某はた百姓萬
民の好む所と後い侍人とも好む計とて

候なりとて云たまふと父國司も理ふ仕と我
子ながらも賢者の器量ありと喜たまふり
國中の人と心と聞傳て天晴民の父母なる
人ならたしむ罷ありて一命は失ふともけ人
の裁勢と逢て死なんそ我生前の心とて
かまき申をり



十五歳の頃より聖人の徳は志すべし時禪坊ふすありて
会那弘願の深意は聞うた他カ佛乘の自派窺ふ十六
歳二月中旬聖人の福田乃草庵小未入して重く小他
カ法門の真義派同り聖人言く他カハ義なりは派義
ごう様なき派極しとるべきは力の姿しといゆるな
まてくく春時感心のわりと夏西よりくまて頻
よ居候し後よ向いて涙と拭いううらむきて聖
人よ馳せし竹塚派下りところろが悲哀の聲しと
何けしべの人よ謁見せり日頃とこの聖人
唯けしげとげがり思へん唐土の孔子よ見候

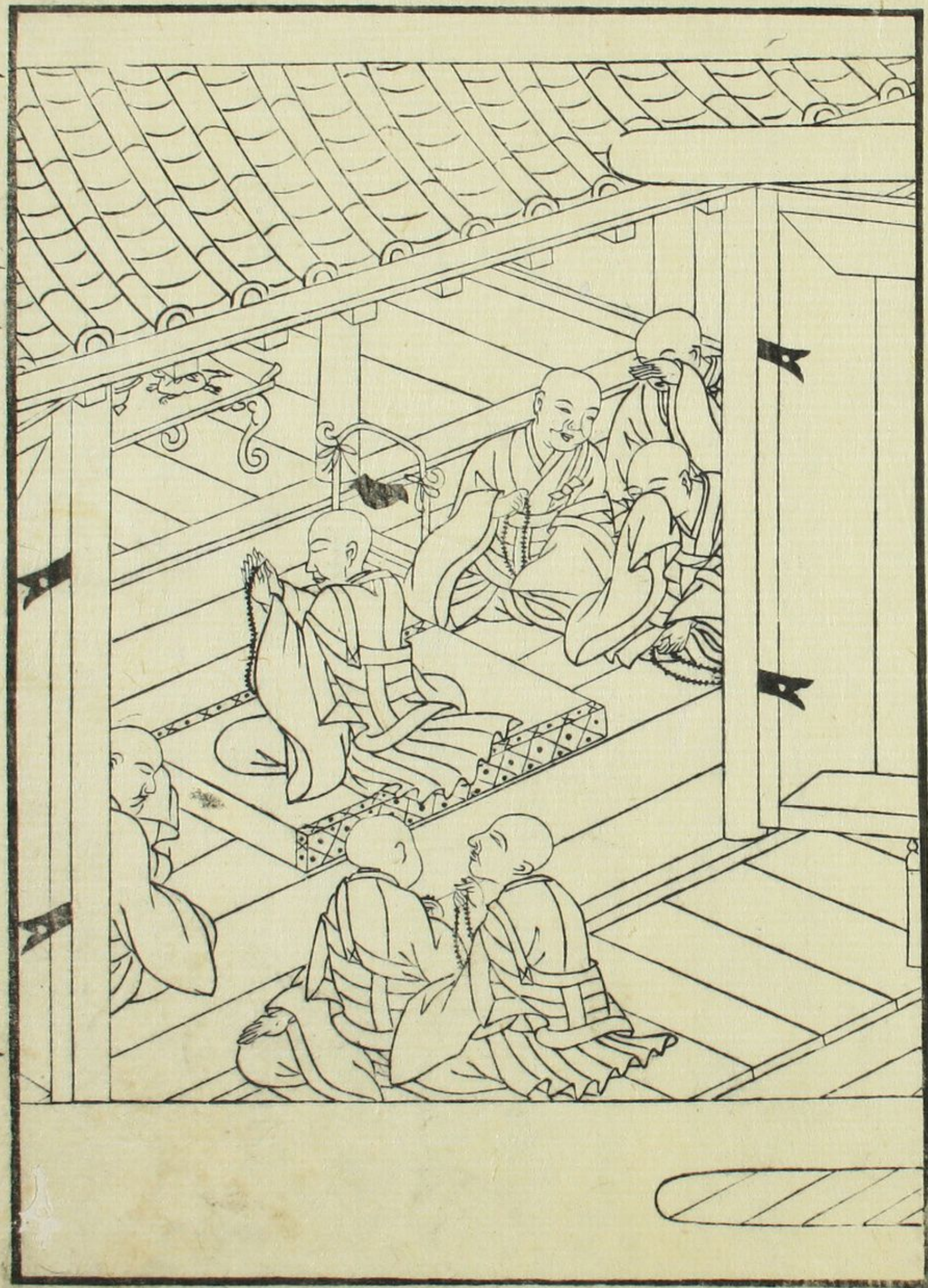
吾朝の宣化御門をかりしやと二聲し首派
地小つけて礼拝しと帰りたり抑し乗
然房順信房やんと御庵室よりておわりと
ころしといふも其意派知こころし後の時まゝ参ら
まらん退出乃にぞし順信房たが祈て云々の時よ志
りのたすひいひゆる意とる侍人と春時答て義
ゆふ派義ごう様なき派極しとるは唯けしげの法よ
人師の私乃法よべん英國の孔子ハ唯先王の道派
述て後人私乃法ののべと吾朝の宣化天皇ハ朕
ハ天皇ハ法度派行ひて王の法度派行ふとまじく宣

一里と云はれぬと云ふは、是は按ずれば二人と云
はらるる聖人ありと思はれ、また如法に依
し、と歸らまはり聖人、是は法に聞きて明日門人
集會のみぎり仰せ、とて云、昨日春時の一言
のく、と何と聞きては、當初大師聖人
御弟子三百餘人の中もかくも、の一言申なる
人、はかり志せし、幼者の人、なまじも他力の法門に
於て、聖覚法印、慈谷入道、など、にのみ、まじり
小賞ゆりなり、と感激、と餘りて、見えたまはり、春時も
亦この事、法に聞て、いふ、聖人、小歸仰、あること、孩兒

の母と思ふ、なり、も深し、念ひ、編み、淨土の法門と
學ぶること、造次、も、水、法、と、と、顛沛、も、こ
と、法、聞、こと、なり、飲食の間、も、い、は、よ、文、法
誦、し、法、一、り、十七、衆、の、十月、祖、師、聖、人、法、拓、法、一、別
發、し、と、け、い、よ、沖、牙、子、と、成、た、ま、し、疏、や、と、學、三、流
又、通、し、利、休、法、と、を、任、ん、常、に、い、聖、人、と、ま、す、け
て、高、田、の、寺、勢、と、看、知、し、又、附、し、城、州、中、科、と、遊
化、を、ま、し、寛、喜、元、年、の、秋、聖、人、より、教、行、信
證、の、真、義、法、相、承、し、日、ど、と、冬、祖、師、の、命、と
隨、て、禿、身、に、ら、よ、選、擇、集、善、と、教、行、池、法、講、法

その貞永元年高田任職の後も感の奥州より
下りて五川の称義は権さ又の甲信二州に遊て
勸化のよき道俗系の風も靡がごとく四十六歳
麻鳩の神官もが招信よりして往生要集は漢
訳志なすよに成りあり笑に侍もに帰依
お早七歳より別清よりおのむきたるはた自
行はくげみはとありよ四十九歳十月東部より
て本師聖人法澤より十一月下旬高田より下り
よりこの付雪人より辭してのこまりく生死の
さごめ阿もごとく畢命の致るがごとく然れども

真佛がごとくきへ明年の春もた安樂界に
今日の珍重これ同浮の永と別り人再會は淨
土に侍奉るがごとく聖人といくわがごとく思ひて夜
共々苦集滅道の邊まで送りたるは悲運して別
たすよ五十歳二月より日毎に門弟の道俗と招て教
勸しありよき浮世の永別は示しをせり三月
朔日衆人の賑をいし一統をて偏に誦經念佛より
唯大日の専空長流の位性二人の給仕せり頭
智專信の付都ふのるを同五日近國の門人と
招くに常陸下總と野陸真等の門弟競ひ集



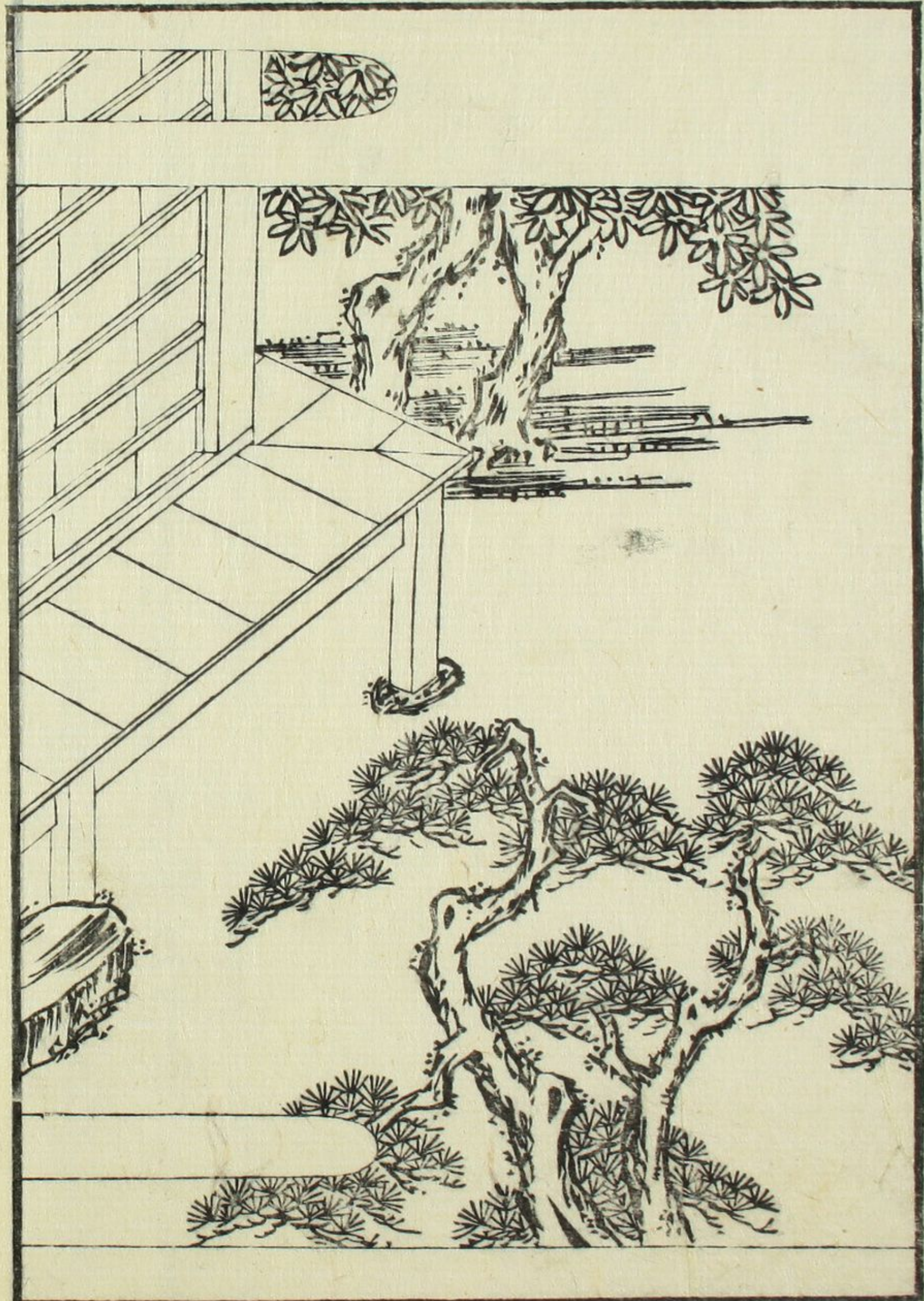
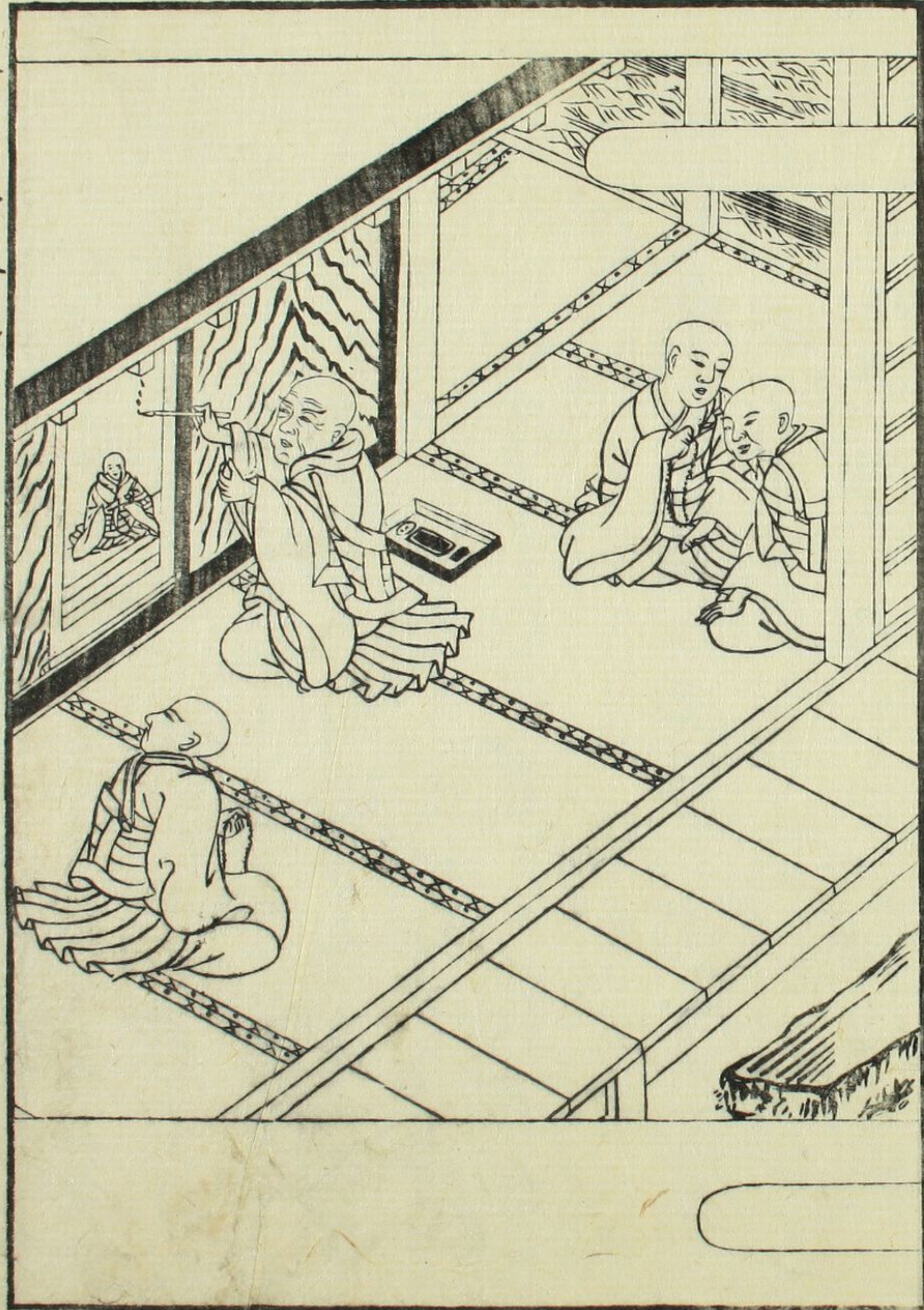
る八日辰刻新淨の法衣法著し諸弟子を説いてい
貧道今日安養小往生とわのく勤行法を
如来堂の正面小端坐合掌して奉尊と
相りし諸牙磬と鳴し伽陀と擧新名合殺に
未刻に至ると師ひり高聲念佛四十八遍
生生不勞諸善業端坐合掌證無為と唱へ
坐しかぐり化寂之の維時正嘉二戊午歲二月八
日也二日小至くと送葬に身體がかわら
ず合掌みごとく春林五十米高田山乃任
職九二十七年一なり

第三祖題智上人とて化生の人なり越後國
余五將軍の後胤井東基知りしよあむつ孫と富士の村
と信ぜわらう富士山と詣つ天池の邊一人の童子ありて
立五五六米けりしを髪長く垂て雙眼と稜あり
童子いし我の疾神の子也孫とてとてとて
りんと固てとてふいて家よかり子とん故と平法
氏とてとて書法後しむふとてとて一と聞て十
二通より一日國上寺乃僧順乾の童子法見て云
これ神人なりとてとんば恐るる喜菩薩の應現也
凡俗の家は養ふるべとてとてとてとてとてとて



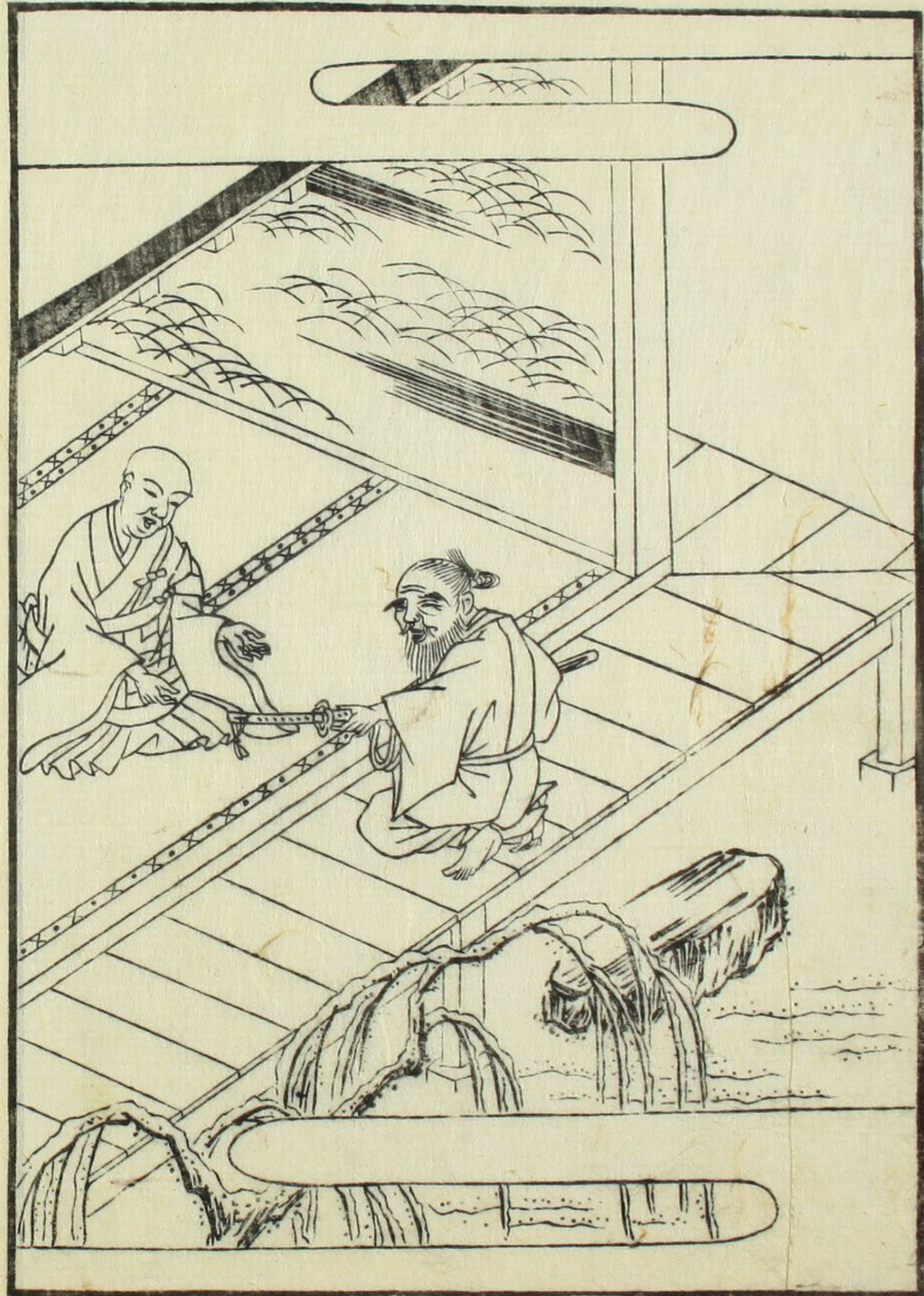
純る小主人より聰敏不羣やして滅ぶ九人より
氏見くこまは短索のほふく亦あはく叡岳よ致と
しこ自ら体ひて登山し東塔の賞賢僧都の坊よ入て
出家し國上君賢順と号し蓋前後二師乃名氏取れ
り學業日よおほくべ好て法華華嚴はく修く大
旨は賤る山よ住く十年たらしらに師父は思て然
後よかつてあふこの時順乾とて化寂し基を
夫婦もすこ死せり賢順悲歎しておほく學
業いすごと稔どしと故郷は顧ること暫く師父
母よすくえんが為りり今師父もに美ぬ無常の

頼りき事如此止めんたらに名刹の窟は脱て
よ出離の直道よふりむんよと一時國の國分寺
小遊ふ或人よのかく親鸞耳入の洞益派語る賢順こ
とと聞て感えたど迷ふ野州高田よ移むくよ時寫
師は帝陛下總派教勸志なすひてたゞ真佛房の
高田小まきしませり因て暫く門下よとすまる高宗
の法文派聞よいりて自得とく生死の煩悩と出
て大光よ早里萬人派延て若海派派の御これよ也
よるハクとすく遠州素烟專信奉りて同門下よ
投ど故よ二人帝よ斯金の志わりふのく國小かつて



其の末行徳の蘊真法同答のり及て二十二箇の
 結法法得るなり後小祖師冲消息と賜つて顯智
 の親鸞が再びよく成らるる候也とのこすなり
 この上人と元来不測乃神足とて高田住職
 の後も毎年二三夜上座して祖師をお潤し
 みらくの化導すもよく盛なり弘長元年
 北國勃化の時日光とよ糸消しゆり権現巫
 二流しと淨土の法門と聽聞し法衣法徳あり
 して性海と授らる其年の冬白衣のを着
 たり一に法持來りて云く是の日光山の邊に

位との也このた刀の遺滅火難法守りの靈徳
 あり買求めて寺院の法護とせしめんと人
 主價法といふ人よを翁あてしめし法價を先
 して性海と賜つておま向て云たりし
 よんえおこれ日光権現受法乃謝禮と擬
 せりて不形るなり



祖師滅後大谷の廟堂は建立し成就の後、寺
 勢と司里給入仍ての上人、以多廟堂の開基
 とん、統共もて、高田の任職な、破地の
 法勢事繁く折々回舎、下里あり、故に専空と
 涼海とかく、廟堂の寺勢、以助、是る、文永十一
 年甲戌春、善爲の子如信、かの姉妹、賞信尼の招、依て初て
 都に登る時、二十六歳也、青蓮院の門、良海律師
 のと、せ、小つりて、学問、明年、建治元年乙亥二月五日、今
 師上治の時、賞信尼の才、是とて、如信と、渴見せ、門
 と、く、子の付、如信、受法の一紙と、捧らる、其状、云々

予是雖為祖師三世之孫生受御歸法之
跡三十餘歲初而上京之處亦逢入滅之
後一生不拜息顏之思悲歎有餘然今
奉渴面授真弟而遙聞聖人口訣之深
旨三代相承受法無所誤亦在世行狀
傳聞尤詳也向後師弟銘骨之誓約永
以傳子孫備末代龜鏡者哉歡喜滿胸
感淚難止心中之誠偏仰祖師照覽頓

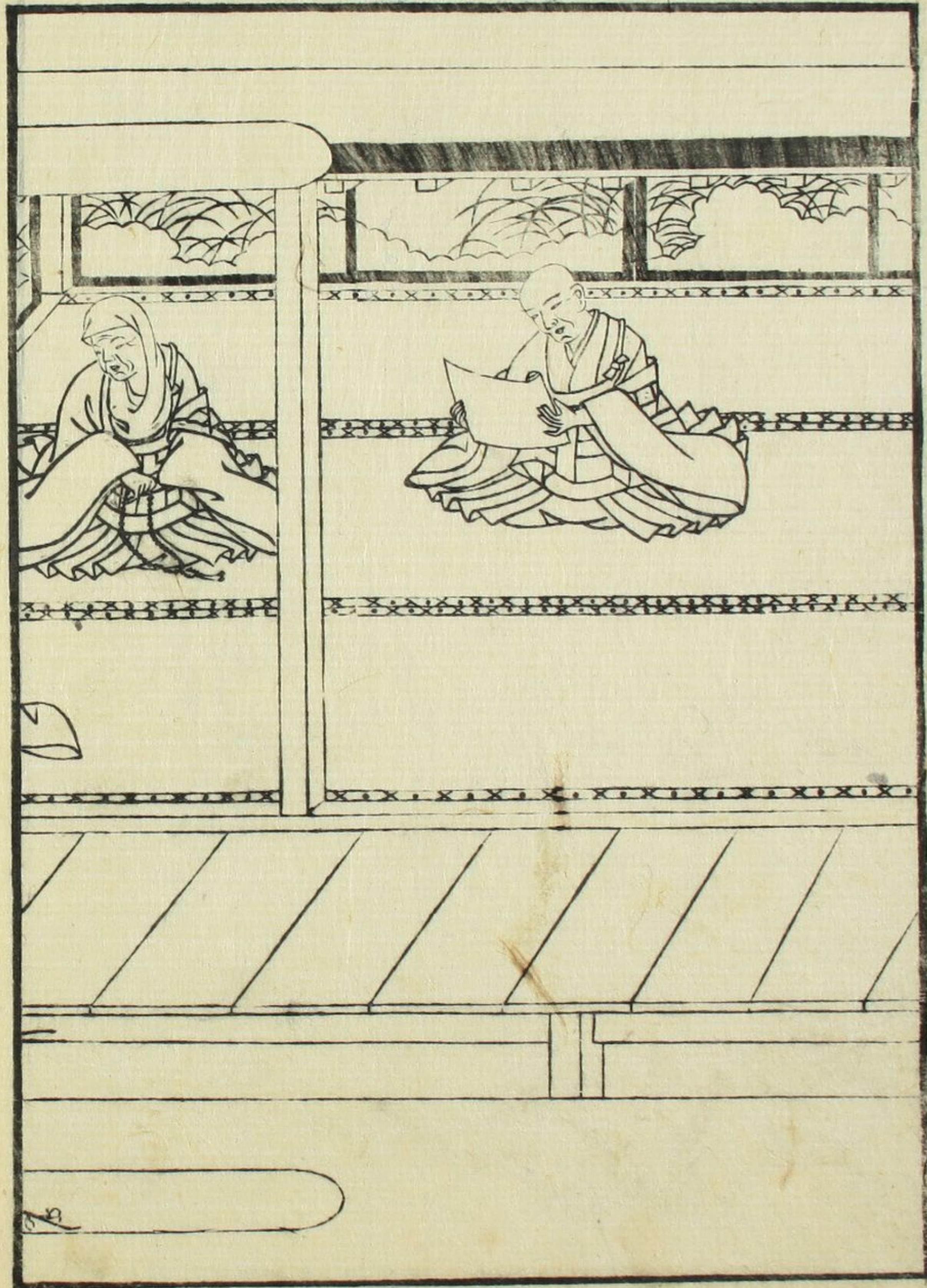
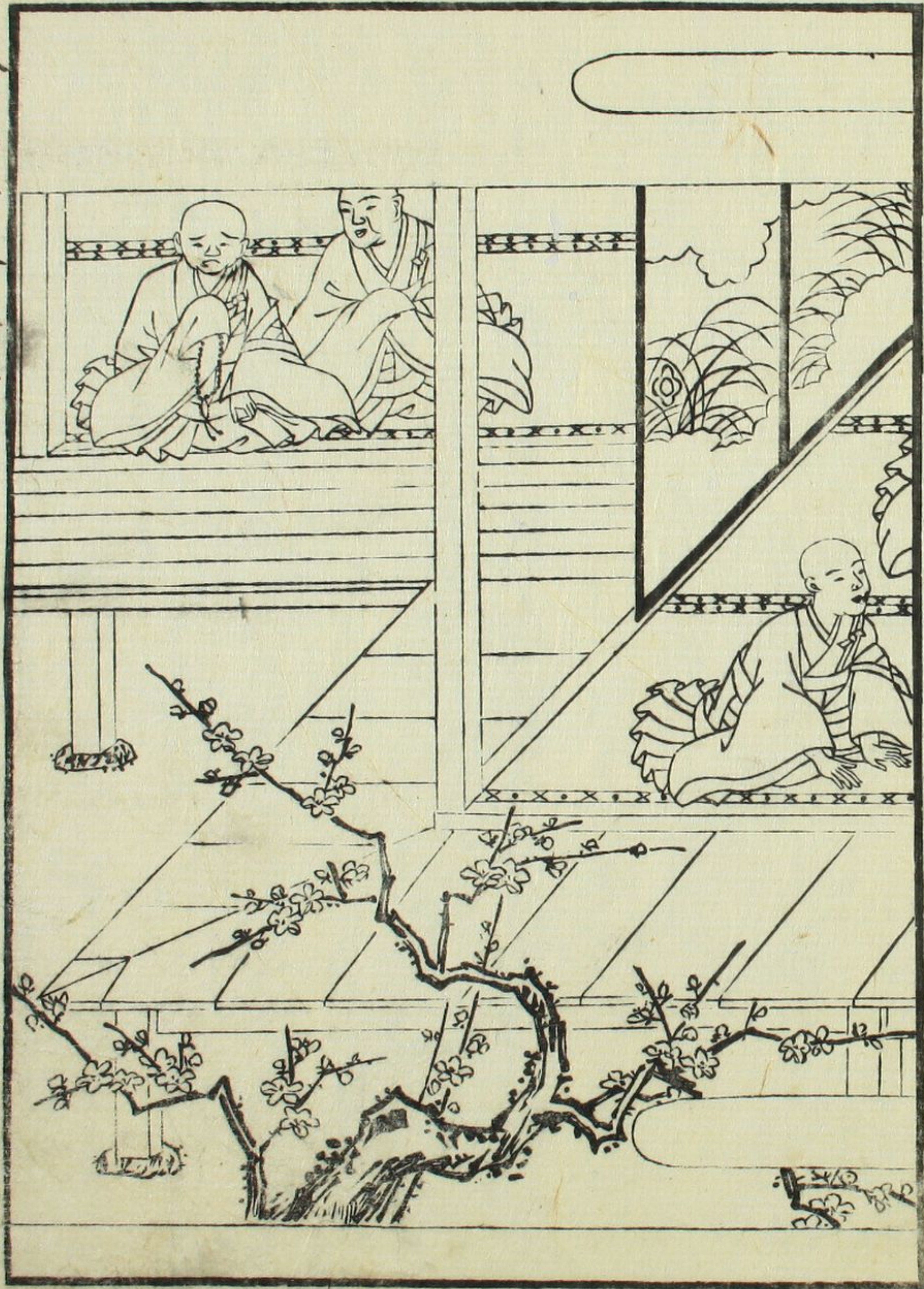
首頓首

建治二年丙子三月五日

受法弟子如信判

謹上

高田顯智上人御坊

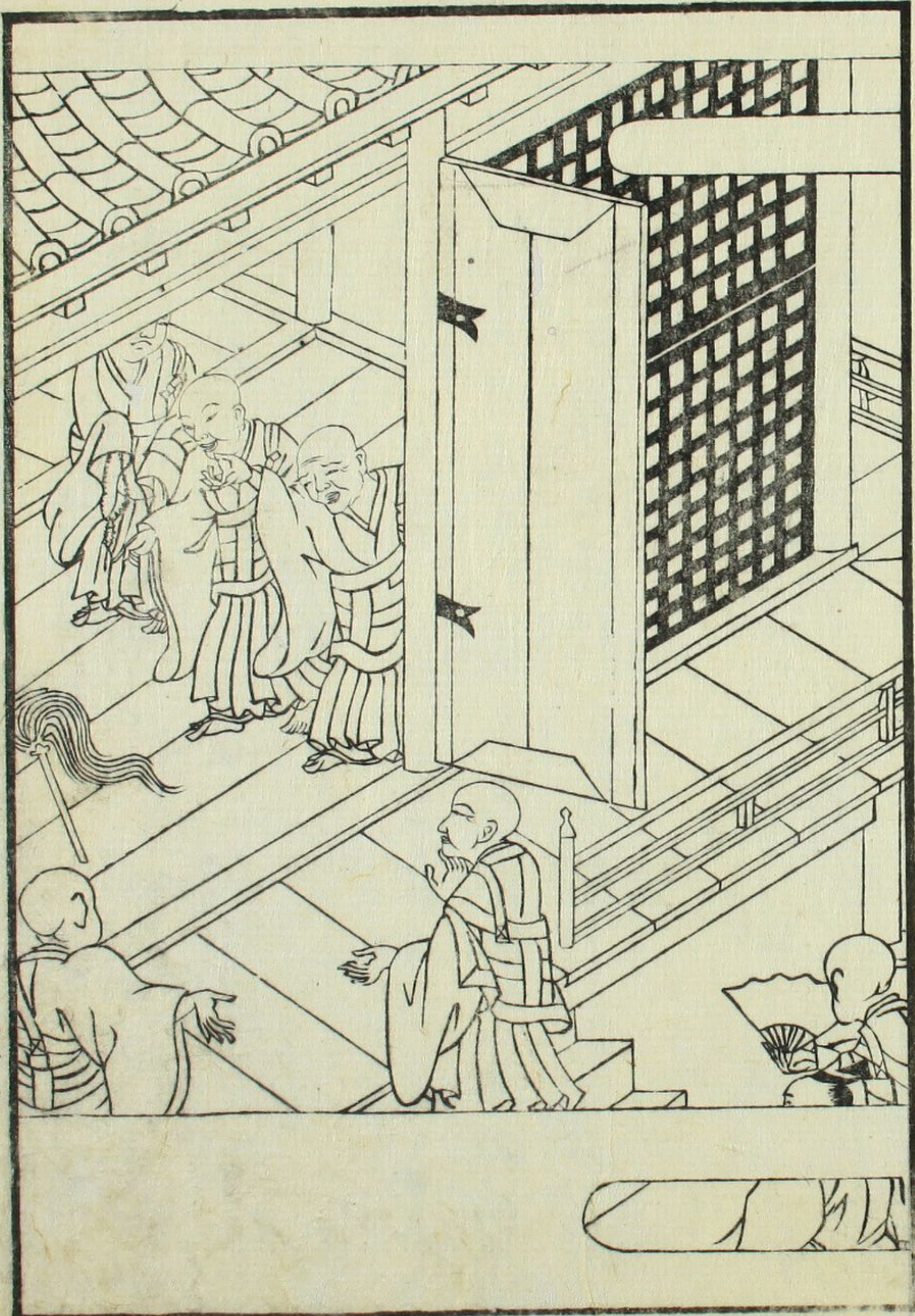


今師嘗て九十四代華園院の勅定小依て法
印大僧都に進み西門兼帯して天台宗聖
光院の門室に補と六條有房卿傳宣せらる
其書今よわり

正慶三年七月四日辰時正慶三年をからしむるを門徒
に集り香紙林火を誦經念佛一遺誠と委
曲し起て金堂に入あり身子尋で金堂
と申けり忽ち方派去らば拂子一枚
とのゝんのみ

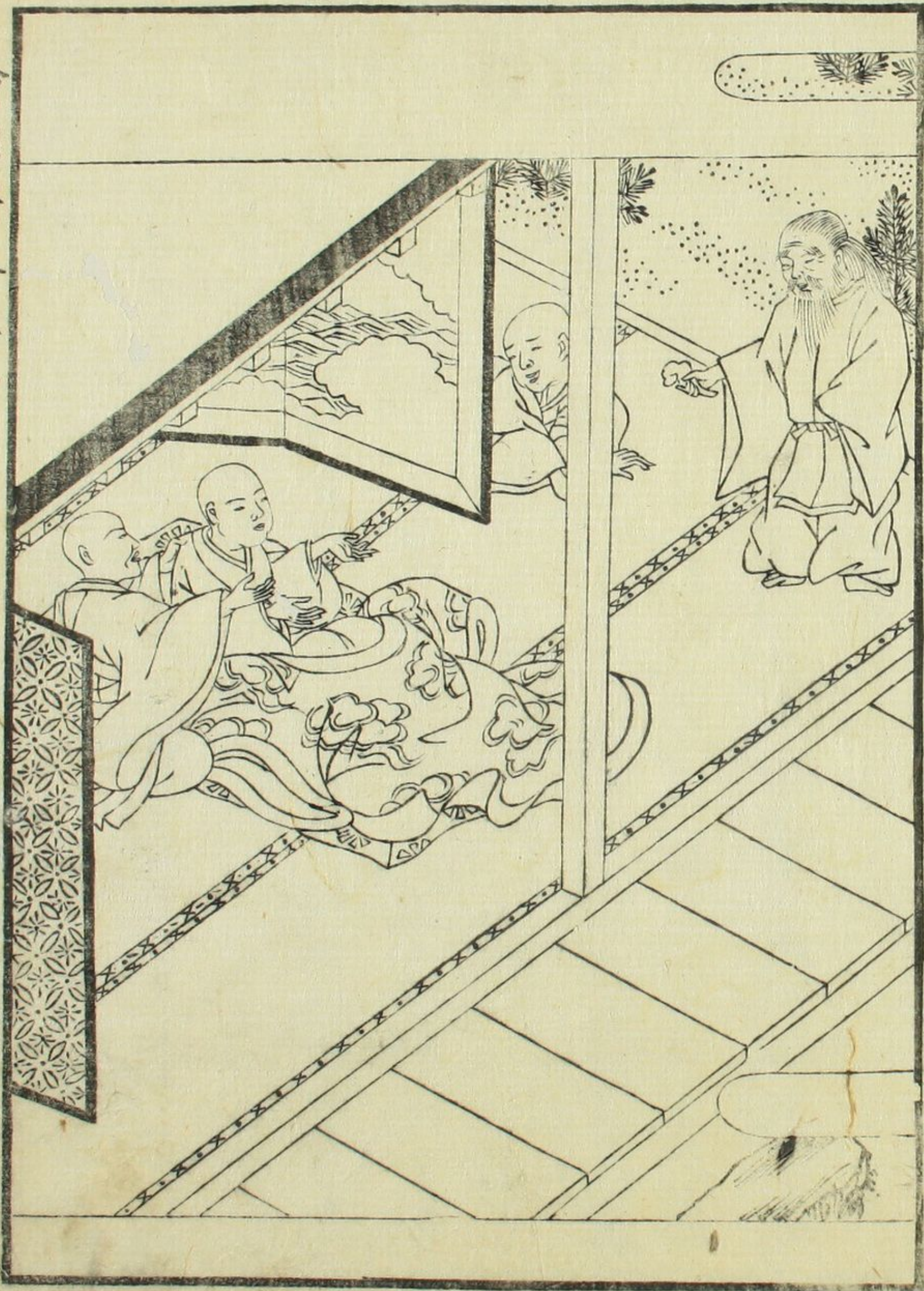
同日午時伊勢國川曲郡まきしりて説法

日没よありてまきしり所在にありありの故に七月
四日派たりて滅日よ定む又嘗て祖師一代の
撰述及び門人よりつゝあゝ消息もも然集り
て高田山の寶庫に蔵めたまふ今時祖教
の天下に流布するに専らこの上人の力よ
りなり



第に祖專宣之人を俗姓平氏鎮守府將
 軍國香口の後胤下野國芳賀赤真國の城主
 大内國行の三男なりり俗名大内冠者行弘と
 号し幼雅より聰明後智の人なり安貞二年
 戊子五月十一日高田に於て祖師の弟子也
 たりたまふ時二十八歳なりり祖師上洛の後眞
 刑より信光爲信等より合せて西へ小
 治化と施し立川の邪義と摧ふるに里村よ
 そ陰眞の私法をよ上人より盛なりりといふ
 安二年己卯之人重病にかりり既におぼし

一夕中より神人來りて紫色の菌はあ
 へくといくこれ百年の靈芝なりりといふ
 は食するに病を癒すなり小瘡なり



正應二年己丑三月頭智之人より高田山の住持職
と受ふる人長亦加給て祖師の教命ありしより
てりり

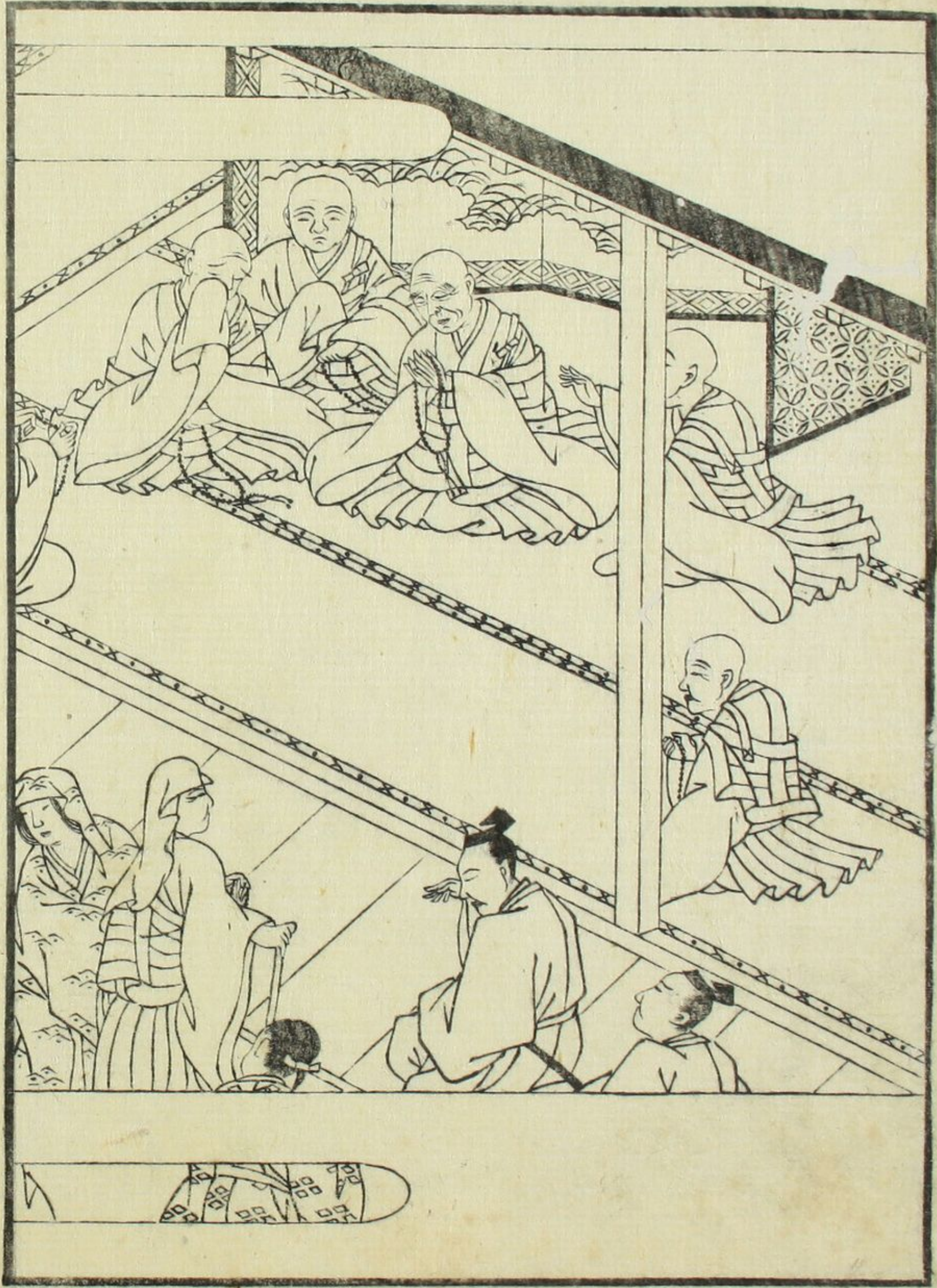
月三年六月東山祖廟見すりりの為上京より又
永仁四年丙申之原一太谷の殿地分内り介
せざればはもて南隣なる青蓮院の門侶良海律師の
園地と買求めて其境とせりしとこの時乃北城東西の
面名十丈南の面十二丈六尺北の面十丈七尺也其
後正安四年壬寅二月員如り所願所の
院文と捧らる其文よ云

在當寺者頭智法師為報恩謝德令勸進
親鸞聖人御門弟等以院宣并公書令依違處
也尔者於後々末代維為子孫令相傳官領輩
不可違犯彼義為後日證文如件

正安四年壬寅二月二十六日 覺如判

阿弥陀寺專空御房に

應長元年上京一園術の所坊に逗留する人よ
てりり
二年己丑三月法よのが至善法院より存員
すりて祖師一生の功状と同しり



康永二年癸亥六月二日高田山の任持成と第二
の真牙定専上人の儀の事あり同年十二月
十八日晨於門弟の道俗に集りて法を説き
奉り日中小及び未刻より暮りて西方に向ひ合掌
以胸に印して念佛教返り園林穢園在百本
彈指之間入室比唱して聲と共に入拜志
とすまの年齢一百二十歳高田山の任職五十
年より一世人の真佛顯智専室の二師と稱
して祖師面授の三傑といはれ尤もに真佛顯智
の両上人と持戒精嚴中して弘願派宣揚

専室上人の迹は在家小僧として念佛と法
通し多くをなせし行状を遺物の匣に納め
ほひたまふ所のものなり行迹ハ心也
これども傳法修戒の心脈展轉相承一巻
の水と一巻のうづらとをばし仰ぐ伝す也

親鸞聖人繪詞傳卷三終

一身田侍臣

河邊縫殿源隆為謹画



高田山御坊御藏版



享和元年辛酉秋七月

五條高倉東江入町

北村四郎兵衛

御幸町御池下町

菱屋孫兵衛

下珠數屋町東洞院西江入町

丁子屋九郎右衛門

寺町松原下町

菊屋吉吾兵衛

賣弘所

